

月の變若水

— 万葉飛鳥の夢 —

西角井正慶

上代文学会が成立した一昨二十七年の春、万葉集普及の一事業として、演劇化も計画され、それには是非折口先生を煩はしたいといふ声があつた。併し先生は当時既に別な方面から頼まれて、東をどりの為に「万葉飛鳥の夢」といふ舞踊劇を作られ、十月には新橋演舞場での上演となつたのである。本会の為には五月初日講堂で開いた猪会記念講演会に「万葉集と民俗」といふ題で、道祖神の民俗を説かれながら、巻三の「人見ずば我が袖もちて隠さむを、燃えつゝかあらむ。着せず來にけり」といふ難解歌に、独自の見解による新しい解釈を試みられた。かういふ問題の歌は、常日頃念頭に浮べられて、追尋されてゐたに違ひない。大正六年一挙に物された「口訳万葉集」の訓読にも非常な苦心が見えて、大胆な訓を施された。「人見がば、吾が袖もちて隠らむを。焼えつゝかあらむ。眠ずて來にけり」（私は此頃は一向寝ないでゐます。かうして焦れてゐねばなりませんまいか。人が私に恋をいひ入れたら、恥しさに袖で隠れてゐるだらうに。其くせに焦れてゐる。）何と大きな変化であらう。一体先生は「あんな恥しい本はない」と、口訳万葉集を引かれる迷惑をかこつてをられた。だ

が、また、名訳も多く歴史的な意義と価値とを持つものとして、全集には收むべきであらう。

さて、「万葉飛鳥の夢」は、敢へて夢と題された如く、「万葉集にある幾つかの歌を各場面の主題として、凡そ百年位の間のいろいろな時代の場面を通じ、万葉時代と言はれた万葉人の平和な明るい、美しいそして文化の高い生活が繰りひろげられる」（解説）七幕の舞踊劇で、月の變若水を求める古代人の幻想をモチーフとしたものである。幕があくと、暗黒の舞台上に大きな忌鏡が一つ浮び、その水が伝ひ落ちる音。明るくなると岩垣淵、白鳥が飛び翁が現れる。巻十六の竹取翁と九人の娘子との歌（三七九—三八〇二）を借りた場面となり、然も白鳥処女伝説を生かし、また「水を賜へな妹が直手よ」（三四三九）の民俗——琉球の手水の縁——に若返つて翁の一生の物語となる（第一）。公役に立つ夫の為蜻蛉頒布に代へて馬を買ふ妻（三三三四）、その留守中病む妻（二八二四五）が、帰つて來た夫に抱かれて死ぬ（第二）。人麿を思はせる壯夫の其が、引手山（二〇八・二一一）の場面となり、埴輪の馬に乗つた女が、山の高みに消えて招く（第三）。月の夜空の男女は、吉祥天女を中心に、広目天と多聞天との仏像の舞となる。実はこの翁の若き日の恋愛葛藤を画き（第四）、やがて元興寺歌壇の華やかな場面となつて、前景の虚空は、額田王と二皇子となり、例の茜さす紫野（二〇・二一）を生かして群舞を縫うてもつれ合ふ（第五）。そこで壯夫の思出は更に少年に立返つて、「わが盛りいたく降ちぬ」（八四七）の古人の感傷を、女帝の心

境とし、捧げまつる月の姿若水、其を窺ふ蘇我の大臣と、之を阻む童男、壺は落ちて破れる（第六）。「天橋も長くもがも。高山も高くもがも。月よみの持たる姿若水、いとり来て、君に戯りて、姿若得しむもの」(三二四五)の置唄で、舞台は童男一人、再び第一景の岩垣淵に還つて、口状となり、私は一生かかつて姿若水を探し歩いたが、実は若やぎの泉は、どこにも湧いてゐるので、あなたの方の胸に鳴つてゐる音は、即ちかの月のをち水のせくらぎの音だと、処女等にかこまれて、また一盛り春を楽しむ舞となり、白鳥の群舞の内に幕となる。到底こんなに短い文章では紹介し切れないが、主役は新橋のまり千代、背景といひ、衣裳といひ、実に念を入れたもので、美しい夢として評判であつた。作曲・振付はまた苦心だつたに相違ない。万葉ぶりの長唄ながら、先生の作詞はよく乗つて歌ひ易いといふのも、作者が永く演劇になじまれてゐた為である。ただ意図せられた、古典舞踊の採桑老や、巫女の所作に用ゐる沖繩舞踊の花風の活用など、また仏像の舞に唐手の棒術とか、求迎の囃子にがんでん即ち壬生念仏とかを利用するといつたことが、多分は普漸あまり民俗芸能に縁のない振付者には、難題であつたらう。見物も同様にそんな身振りを問題としない。ただ美しく目に快ければ、また何か思想があればと見てゐるのかも知れない。だから美は大切なのである。元興寺門外を訪れる女踏歌の踊りの列、「村の葉井に白玉しづくや……」の催馬楽。雅楽以前の民謡としての時代はどうであつたか。オシントンドの囃子詞など、例へば映画の「大仏開眼」には、全く「苦い米」の手

法で、然もさながら士人の舞踏であつた。大場警雄監修の「登呂の人々」などはバレー式に仕立てたが、細文式時代なら、其も止むない身振りであらう。舞台では一層美しくあるべきだが、この舞踊劇でもつと原始的でありたかつたのは、九人の処女の白鳥の舞である。若者の舞ふ白鳥の舞、既にそこに越え難き芸が身についてある人々だから、無理な註文とならう。その秋、先生は軽い卒中の症状があつて、何の助言もされず、千秋楽の日やつと見物に出かけられ、まあまあと仰言つてをられたといふ。この時出されたパンフレット「万葉飛鳥之夢」には、先生はじめ伊馬春部・戸板康二・池田彌三郎・岡野弘彦・三隅恭太郎の門下諸氏の解説を収め、万葉学にとつても、非常によい本となつてゐる。万葉味読の方法を教へてゐるといへる。

だが今この舞踊劇の意図について言ふなら、筋書に載つた池田彌三郎氏の言葉を借りたい。「此作で作者が書かうとしてゐるのは、万葉びとの上に普遍してゐる運命である。個人々々、一つ一つの事件、それは問題ではない。それを通じて現れてゐる時代の運命と言つたものを問題にしてゐる。或時は君に、或時は女君に、臣に民人に、或ひは神や仏たちの上にさへ、さういふ運命は現れて来る。だから時に歴史に明らかな事件が、装ひをかへて舞台の上に現れたりもするが、その一つ一つにこだはることはない。史劇ではないからだ。」その運命の象徴を、月のをち水の空想にとらへ、竹取の翁の歌を主題に、万葉びとの生活を画いたものである。

劇の構想は万葉ではないが、先生が屢々試みられてゐたもので、戦前国学院の郷土研究会の年中行事として、毎年のやうに水神祭を催した。祭神は津輕地方のお水虎様シッコの像を、仏師に模造させ、之に入魂して、常は先生宅の玄關神棚に祀つてあつた。その祭りにお神楽として河童劇をやり、毎回新しく脚本を書かれ、高崎正秀と私とが、シテアドをつとめ、学生の河童多勢と楽しんだものである。これは全く茶番劇であつたのだが、この玄人の為の舞踊劇すら、茶番と評されることを予め自任してをられる。伊馬春部氏の伝へた文には「生命の永続について希望を失つてしまつた近代人は、その為にかういふ作物を見ても眞実性を感じないかもしれない。さういふ人にとつては、單なる茶番にすぎないことになつてしまふ。作者に言はせれば、茶番も結構、さうあることを寧ろ望んでゐるやうである」とある。併し、私たちは少くとも、万葉の歌をどう劇化してゐるかを、期待して見に行つたのであつたが、それはむしろどうでもよいことかも知れぬ。さうしてこの舞踊劇に語られてゐることは、先生が學問の上で追求された、古代人の生命觀、永遠の信仰が、万葉の歌を活用して具体化されたものと考へられる。其は若き頃の作「大山守」の劇詩にも、或ひは「死者の書」にも通じよう。この作と時を同じくして成つた論文は「民族史觀における他界觀念」にも思ひあたるものがある。つまりは永遠の生命を教へて、先生は今は靜かに常世辺の翁とをち返つてをられるのだ。

黄泉の草の上

森 本 治 吉

(一)

九月廿三日二時、齋藤茂吉・釈超空兩氏追懷講演会を開く——かういふ日本歌人クラブの幹事会の相談を終つて、唯今帰宅したところである。私はこの講演会の成功の爲に全力を盡して働くつもりである。

一方は土の匂濃き山形、一方は近松西鶴以来のダンディーの街。蜜骨を誇つて好んで論争を卷起す癖と、一度も學術論争を展開しなかつた柔軟性。医師の本職、国語科大学教授。

ずるぶんな差異があつたにかかはらず、多分の相似点があつた。共にアララギ同人として作歌した事。本業のほかに幅広い文學活動を持続した事。共に神懸質な一面がありつつ驚くほど仕事に粘り強い。共に一団のグループの登頂に在つて宗祖的位置を占め、齋藤先生は写生主義短歌の、折口氏は民俗學集團の深い尊敬的となつた事。その上、逝去の時期がごく相近かつた。

だから我々歌人は、茂吉を言へば超空を想ひ、超空を筆にすれ